

V 深海底棲資源開発並びに漁具漁法改良開発試験

沖縄諸島の周辺深部には底棲性の有用資源が多く棲息しているものと考えられ、これまでの調査結果でも何種類かが判明している。

ところで深海を対象とした漁業を行うには、漁具の選択又はその操作には諸種の困難が伴うため、その開発は余りはかどらない。このような現状から、能率漁具の開発を行い、未利用資源並に漁業開発に寄与すべく本調査を実施した。

1. エビ漁場調査

沿岸深部の200米以深のエビ類を主対象として資源開発と漁具の能率化を図るため、昨年度に引続き実施した。

(1) 調査期間及び海域並に使用船舶

航次	調査期間	日数	調査海域	漁場水深	使用船舶
第1次	1968年9月10日 ～14日	5日	喜屋武岬沖から久高島沖	200m～ 336m	くろしお (21.44t 100HP)
第2次	1968年11月5日 ～11日	7日	慶良間諸島周辺	43m～ 107m	〃
第3次	1969年4月7日 ～11日	4日	残波岬沖	90m～ 345m	〃
第4次	1969年4月16日 ～18日	3日	名護湾沖	230m～ 360m	〃

(2) 使用漁具

イ. エビ籠22ヶ (円筒型、底周80cm、上蓋周70cm、高さ50cm、二つの入口あり、10本合せ、12節網を被せたもの)

この漁具は第1次、第2次まで使用、

ロ. 小型底曳網1統

第3次から使用

(3) 調査方法

イ. エビ籠は延縄式により投入の際は人手により揚籠の際は巻揚ドラムで巻上げを行い、資源調査を行う外、漁獲並に操業能率等の調査も行った。

ロ. 第3次以降では小型底曳網を使用し、巻揚げは従来の巻揚ドラムを改良した油圧式巻揚ドラムにより行い、前記の調査を行った。

(4) 調査結果

イ. 出現種について

(A) エビカゴによるもの。

a. 200m以深336mでは、ジンケンエビ(89%)、オキノスジエビ(11%)の割合で出現している。

b. 40~107mの浅い所では、ウチワエビ、カニ、ヤドカリの外、クチビタイ、イトタマガシラ、オジサン、サツマツブリ貝等が入籠した。

(B) 小型底曳網によるもの

a. ハコエビ、オキノスジエビ、ジンケンエビ、ウチワエビ、サケエビの外 *Opiophorus gracilirostris* が一番多く出現した。

b. 魚類では、ホウネンエソ、コブシメ、ソコハリゴチ、アンコー、ソコホウボウ、オオメハタ、カサゴ、ニシキハナダイ等

ロ. 揚網能率について

(A) エビカゴの場合

水深200~350mのところ、カゴ間の間隔を18mとし、22ヶ付の漁具を揚げる時間は、平均47分。

(B) 小型底曳網の場合

水深270~360mのところでの平均揚網時間は34分である。

2. アイザメ調査

分布状況並に資源量調査の目的で1967年度以来実施した。

(1) 調査期間

第1次 1968年8月12日~18日

第2次 1969年5月7日~13日

(2) 調査海域

第1次 残波岬沖及び伊江島沖 400~600m水深

第2次 残波岬沖 220~625m //

(3) 調査方法

底延縄漁具2鉢(釣針は1鉢に付100本)を使い、アイザメ外深海サメ類の釣獲率を調べ、これの漁場別分布状況、量の判断資料を得ると共に生態調査も行った。

(4) 調査結果

イ. 分布状況

第1次、第2次を平均して、約16%の釣獲率を示して居り、漁場における資源分布状況は多い、これと昨年度の調査結果から、資源分布では、沖縄本島東部海域より西部海域の方が密度は高いようである。

ロ. 深度別分布については、300m以深に多い。